

JST 理事長 記者説明会

令和2年 9月 16日

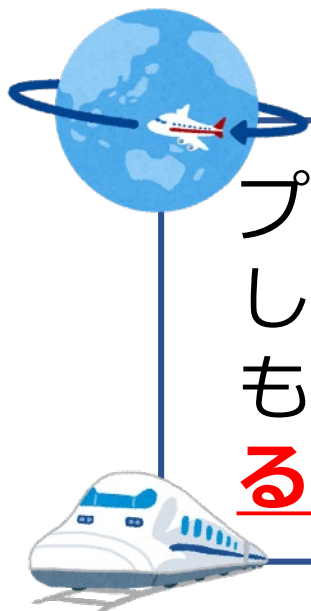


科学技術振興機構

COVID-19への対応に向けたJST「プランB」

「プランB」とは

プランA（ワクチン・治療薬開発）と並行してコロナウイルスの存在を前提にしつつも、**制限無く移動ができ、自由に人と会える・集える、経済活動ができる社会**を実現



一方、現状の対策では
人々の行動を制限せざるを得ない

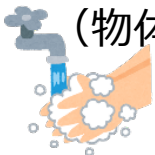
現状

見つける



検温、PCR・抗原・抗体検査

清める



手指消毒、アルコール除菌
(物体表面除菌)

護る



感染者行動検出・
隔離、マスク

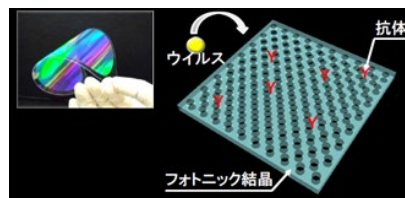


科学技術イノベーションによる対策のアップグレードが必要

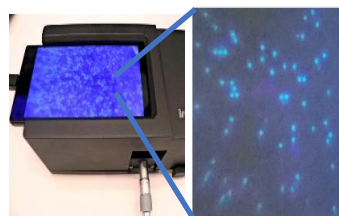
プランB

JST 見つける

高感度ウイルス検出技術
(物理的空間)

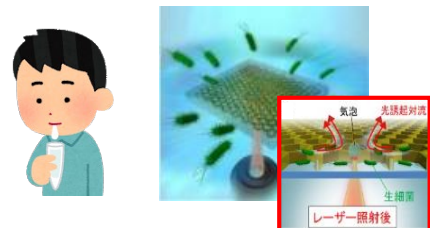


フォトニック結晶シート 研究開発中



デジタルウイルス検出法 研究開発中

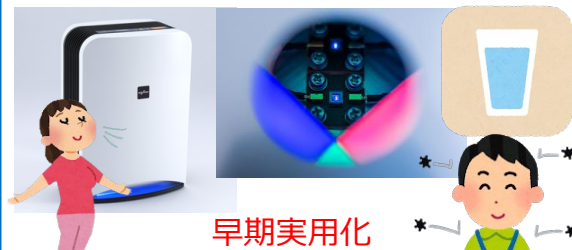
低侵襲高速高感度検出技術



低侵襲ハイスループット光濃縮システム
研究開発中

JST 清める

深紫外LED (空気、水、エア
カーテン、マスク殺菌等)



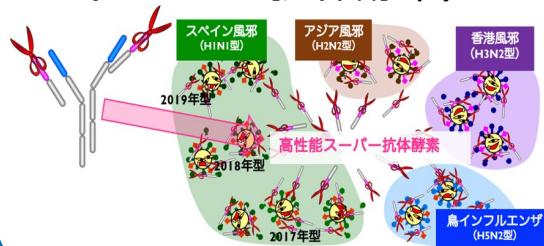
早期実用化

ダチョウ抗体 (エアコン
フィルター等への応用)



早期実用化

ウイルス不活化技術
(スーパー抗体酵素)



研究開発中

JST 護る

高機能マスク
(ダチョウ抗体等)



ダチョウ抗体 実用化済

遠隔検診システム



クラウドサービスMeDaCa

実用化済

見つける・清める・護る技術の最適な配備

病院・介護施設・学校等の脆弱性や、当該技術のコスト・生産能力等を考慮した最適な配備を考える必要がある

病院・診療所 (国民を護る)



<病院・従事者数>

病院数（歯科医院除く）：約11万院*1
医師数（医療機関従事者）：約31万人*2
看護師・准看護師数：約129万人*3

<特徴>

- 直接感染者に対する診断・治療が必要
- 院内感染の回避
- 患者の症状によっては看護時等に密着する必要あり
- 薬機法により認可等必要な場合あり

*1：厚生労働省平成30年度医療施設（動態）調査

*2：厚生労働省医師・歯科医師・薬剤師統計

*3：厚生労働省平成30年衛生行政報告例（就業医療関係者）から病院、診療所、助産所、訪問看護ステーション従事者を集計

介護保険施設 (高齢者を護る)



<施設・定員・従事者数>*1

施設数：約13,000施設
定員数：約97万人
従事者数：約62万人*2

<特徴>

- 要介護者が高齢・持病等重症化しやすいリスクを抱えているため、徹底した防護が必要
- 医療機関ほど感染症に対する設備が整っていない
- 要介護者の症状によっては介護時に密着する必要あり

*1：厚生労働省平成29年介護サービス施設・事業所調査

*2：厚生労働省平成29年介護サービス施設・事業所調査の1事業所当たり従事者数に事業所数を乗じ算出

学校 (日本の未来を護る)



<学校・生徒・教員>*1

小中高等学校数：約35,000校
児童生徒数：約1,283万人
教員数：約90万人

<特徴>

- 児童生徒間のソーシャルディスタンス確保が困難
- 衛生管理の徹底が困難
- 無症状感染の多発リスク（学校だけではなく、家庭内クラスター発生リスク）

*1：文部科学省令和元年度学校基本調査（確定値）

商業施設 (経済を回す)



<小売業事業所・従業員数・売上高>

*1
事業所数：約48万事業所
従業員数：約539万人
年間売上高：約130兆円

<特徴>

- 不特定多数の来客があり、感染リスクあり。感染経路の特定困難
- 業態により対人スペースは様々。対面接客を行う場合は感染リスクが増大。

*1：経済産業省平成28年度経済センサス

飲食業 (経済を回す)



<酒場等事業所・従業員・売上高>*1

事業所数：約16万事業所
従業員数：約74万人
年間売上高：約3.15兆円

<特徴>

- 密の条件を満たす空間、接客形態のため感染リスク大
- 従業員、客等からのクラスター、感染拡大問題化（夜の街事例）

*1：経済産業省平成28年度経済センサスから、酒場、ビアホール、バー、キャバレー、ナイトクラブを合算

イベント・移動 (経済を回す)



<国内イベント消費規模・国内旅客数>

国内イベント全体消費規模：約17.5兆円*1
国内旅客数：約314億人*2

<特徴>

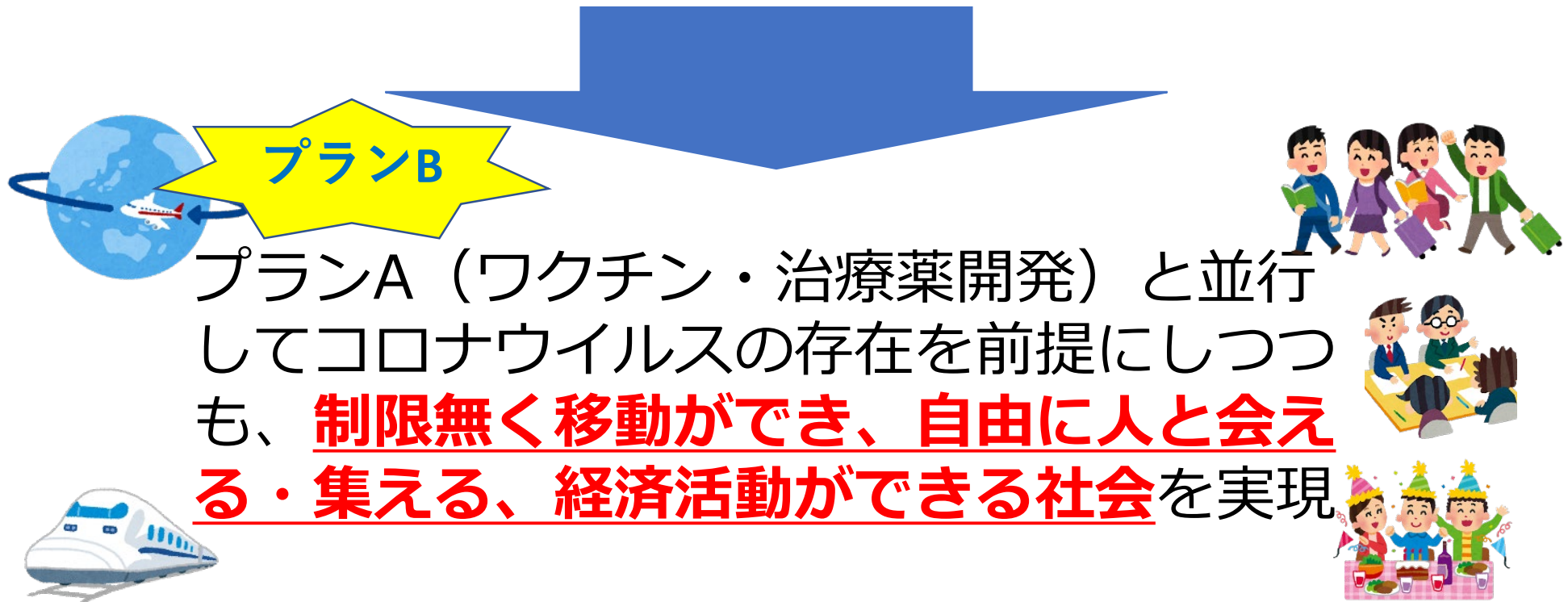
- 不特定多数が集い、大声を発する、長時間の接触等感染リスク大
- 感染経路、濃厚接触者の特定困難

*1：一般社団法人日本イベント産業振興協会「2019年イベント消費規模推計報告書」

*2：国土交通省平成30年度鉄道輸送統計調査・航空輸送統計調査・自動車輸送統計調査より合算

COVID-19への対応に向けたJST「プランB」

それぞれの施設に最適な技術を
最適な分量でより迅速に配備することで



**戦略的創造研究推進事業(CREST)
2020年度研究提案臨時募集
(コロナ対策臨時特別プロジェクト(仮))
の予告について**



科学技術振興機構

【予告】 戦略的創造研究推進事業(CREST)

2020年度研究提案臨時募集(コロナ対策臨時特別プロジェクト)について

JSTでは、新型コロナウイルスをはじめとする新興・再興感染症との共生に資する新技術シーズ創出に向け、医療分野に留まらない様々な分野の研究者の力を結集した異分野融合研究を推進するため、戦略的創造研究推進事業においてコロナ対策臨時特別プロジェクトを立ち上げます。

<募集内容>

研究内容: 分野・研究領域を超えたチームでの基礎研究を実施し、新興・再興感染症との共生に資する新技術シーズの創出

(※臨床研究や医薬品開発など医療分野に限定するような研究開発は除く)

研究費 : 50百万円(直接経費)/年・課題

採択件数: 10件程度

研究期間: 令和2年度～令和5年度(約3年間)

研究体制: 情報学、環境科学、工学、物理学、有機化学、計算科学、基礎生物学などの研究者を研究代表者とし、必要に応じて人文・社会科学系、医薬臨床系の研究者が参画する異分野融合研究チームを構成

<スケジュール>

募集期間 2020年9月下旬～10月下旬

選考期間 2020年11月上旬～12月下旬

研究開始 2021年2月1日(予定)



ムーンショット型研究開発事業 新たな目標検討のためのビジョン公募 ～日本を変える、世界を変える、あなたが変わる！～



科学技術振興機構

「新たなムーンショット目標検討のためのビジョン公募」

**2050年の社会像や価値観はどうなっているか、
わたしは、どうしていききたいか。
考えを深めあってみませんか。**

- 公募対象：若手人材からなるチームが考える、2050年の社会像のあるべき姿
(新たなムーンショット目標候補案)
- 採択チーム数：20チームを目安。
- 資金のサポート：その社会像を実現するために必要な取り組みを調査するための費用
(1チームあたり、500万円が標準)
- 調査研究期間：約半年(2021年1月～6月予定)
- 応募は、e-Rad(公募システム：<https://www.e-rad.go.jp/>)から。

＜採択後の調査活動＞

- チーム間でそれぞれの社会像を議論しあうワークショップに参加していただきます。
- 各界で名を馳せたビジョナリーリーダーとビジョンについて議論していただきます。
- 様々なステークホルダーが集まる公開の場で調査研究結果を発表していただきます。
- 半年の調査研究の後、高い評価を得たものから、国の新たなムーンショット目標が設定されます。
そして、
設定されたムーンショット目標の下に、数億～数十億円規模の研究プロジェクトが開始されます。

本プログラムの運営体制及び公募対象

ガバニング委員会

ムーンショット目標1 萩田 紀博

ムーンショット目標2 祖父江 元

ムーンショット目標3 福田 敏男

ムーンショット目標6 北川 勝浩

既に決定したムーンショット目標
(JSTが推進する研究開発)

採択予定数：

20チームを目安

調査期間：

2021年1月～6月

調査費用：

500万円を目安
(直接経費)

【ビジョナリーリーダー】

総括：

渡辺 捷昭 (前 トヨタ自動車株式会社 代表取締役社長)

副総括：

足立 正之 (株式会社堀場製作所 代表取締役社長)

天野 浩 (名古屋大学 未来材料・システム研究所 教授)

久能 祐子 (S&R財団理事長 (米国)、

Halcyon共同創設者兼理事 (米国)、

京都大学理事 (非常勤))

【公募対象】新たなムーンショット目標 検討チーム

チーム1

新ムーンショット
目標案1

チーム2

新ムーンショット
目標案2

チーム19

チーム20

ビジョナリーリーダーから応募者へのメッセージ



(渡辺) このプログラムの目指すところは、2050年の夢の社会像を描き、その実現のために、次代を担う若手人財による柔軟かつ自由な発想と知恵の結集です。アプローチの仕方は2つあると思います。1つは、課題解決型。現在および将来に予想される課題への解決方法を考える。2つ目は、夢実現型。2050年を一応のターゲットとしますが、その先も見据えた夢を描き、実現するバックキャスト的なアプローチ。もちろん、アプローチの仕方もこの2つに限らず自由な発想で考えてみてください。



(足立) 科学技術の変化やパワーバランスの変化が加速する-その変革を担うのは若い心、明確なビジョンを持っているチャレンジャー。特に期待したいのは強い野望とリーダーシップ。人々を寄せ付けるチームスピリットと行動力。



(天野) 研究者は課題解決に没頭できる人、成果の意義を広くアピールできる人、様々な応用展開を思いつく人、等、さまざま。様々な能力を有する研究者が協力して取り組む。年齢で上下関係を定めるのは百害あって一利なし。



(久能) クリエイティビティも大事ですけども、今回はイマジネーション、ということで、ゴールを設定し、そこに行ったときに見える姿を想像するというのを皆さんに考えていただきたい。Trust、GRIT（やりきる気持ち）、共感を大事にする気持ち。



公募スケジュール・公募情報

公募期間	9月8日（火） ～11月10日（火） 正午
書類選考期間	11月中旬～11月下旬
面接選考期間	12月初旬～12月中旬
選考結果の通知・発表	1 月初中旬

【公募ページURL】（ビジョナリーリーダーのメッセージ映像等も掲載しています）

（日本語） <https://www.jst.go.jp/moonshot/koubo/202009/index.html>



（英語） <https://www.jst.go.jp/moonshot/en/application/202009/index.html>

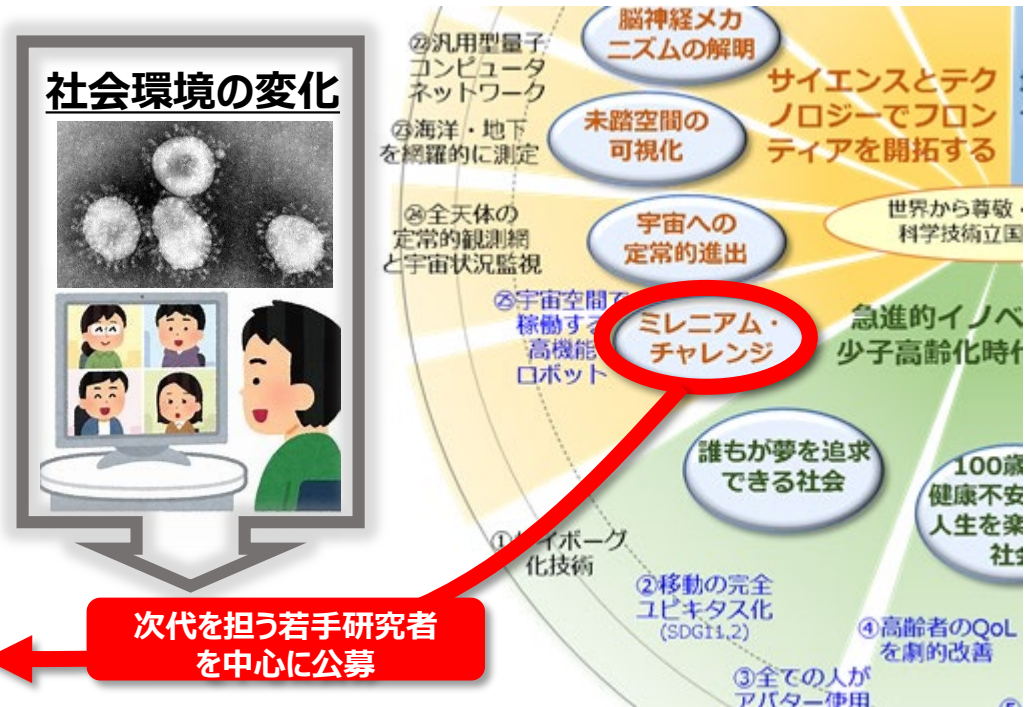


- ムーンショット型研究開発制度では、超高齢化社会や地球温暖化問題など重要な社会課題に対し、ビジョナリー会議の提案等も踏まえ、人々を魅了する**野心的な目標を国が設定し、挑戦的な研究を推進**。
- 同制度では、**社会環境の変化等に応じて目標を追加**することとしており、**コロナ禍による経済社会の変容を想定し**、我が国の将来像に向けた**新たな目標を検討**。

ムーンショット目標

- 目標1: 2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現
- 目標2: 2050年までに、超早期に疾患の予測・予防をすることができる社会を実現
- 目標3: 2050年までに、AIとロボットの共進化により、自ら学習・行動し人と共生するロボットを実現
- 目標4: 2050年までに、地球環境再生に向けた持続可能な資源循環を実現
- 目標5: 2050年までに、未利用の生物機能等のフル活用により、地球規模でムリ・ムダのない持続的な食料供給産業を創出
- 目標6: 2050年までに、経済・産業・安全保障を飛躍的に発展させる誤り耐性型汎用量子コンピュータを実現
- 目標7: 2040年までに、主要な疾患を予防・克服し100歳まで健康不安なく人生を楽しむためのサステイナブルな医療・介護システムを実現
- 目標X: 新たなムーンショット目標**

ビジョナリー会議提言／13のビジョン



「社会環境の変化や科学技術の進展等に応じ、必要と認められる場合は、技術的な実現性に関する評価を行い、国内外の見解を聴取した上で、CSTIはMS目標の追加・変更等を行う。」(運用・評価指針より)

“Moonshot for Human Well-being”

(人々の幸福に向けたムーンショット型研究開発)

R2.7	8	9	10	11	12	R3.1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
CSTIでの議論		目標検討チーム公募		チーム審査			各チームでの調査研究・国際WS開催・IR作成				公開審査会 CSTIでの議論		PM公募		書類・面接審査		
方針決定				目標検討チーム選定							目標決定・PD任命						PM採択

創発的研究支援事業の パネルオフィサーの決定



科学技術振興機構

創発的研究支援事業のプログラムオフィサーの決定

概要

特定の課題や短期目標を設定せず、多様性と融合によって破壊的イノベーションにつながるシーズの創出を目指す「創発的研究」を推進する本事業では、既存の枠組みに囚われない個人研究者の自由な発想に基づく挑戦的な研究を、長期的な視点で統括するプログラムオフィサー（創発PO）の役割が非常に重要である。今回様々な分野の研究者から14名の創発POを決定した。

今後の予定

- 募集締切 7月31日(金)12:00(済)
- 書類選考 8月上旬～11月中旬
- 面接選考 12月上旬～2021年1月中旬
- 研究開始 2021年1月以降

創発POの略歴等(1)

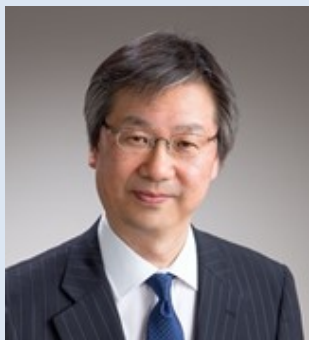
阿部 敬悦 (東北大学・農学研究科・教授・農学部長・農学研究科長)



【専門分野】応用微生物学 (農芸化学)

東北大学卒業後、キッコーマン株式会社、米国Johns Hopkins大学を経て、1999年 東北大学へ。2009年より東北大学大学院農学研究科教授を務め、2017年東北大学未来科学技術共同研究センター副センター長、2019年より研究科長・学部長を兼務。この間、日本農芸化学会理事、日本農芸化学会副会長等を歴任。日本農芸化学会BBB論文賞などを受賞。博士 (農学)。専門は、応用微生物学で、産業微生物に関する新規バイオプロセスの研究開発を行っている。特に、微生物細胞表層機能の解明と応用展開として、輸送体を利用した化成品の発酵生産、糸状菌高密度培養技術の開発、糸状菌のプラスチック分解機構の解明、抗真菌剤探索技術の開発など、広範な分野での応用研究に取り組む。

天谷 雅行 (慶應義塾大学・医学部長・皮膚科教授)



【専門分野】皮膚科学、免疫学

慶應義塾大学医学部にて博士号 (医学) 取得後、米国NIH、慶應義塾大学医学部を経て、2005年より同教授。慶應義塾大学病院副病院長、学部長補佐を経て、2017年より同医学部長。2013年より理化学研究所 統合生命医科学研究センターチームリーダーを兼務。この間、日本研究皮膚科学会理事長、日本皮膚科学会理事長などを歴任。全米医学アカデミー国際会員、日本学術会議会員、欧州研究皮膚科学会栄誉会員、米国皮膚科学会国際栄誉会員など多数受賞。尋常性天疱瘡の抗原同定や世界中で使用されている天疱瘡の血清学的診断薬の開発、そして天疱瘡のモデルマウスの作成に成功し、自己免疫疾患と皮膚疾患との関係を分子レベルで解明するなど、自己免疫疾患研究の第一人者。

創発POの略歴等(2)

石塚 真由美 (北海道大学・獣医学研究院・教授)



【専門分野】化学物質影響、環境農学、獣医学

北海道大学にて博士号（獣医学）取得後、国立環境研究所を経て、北海道大学獣医学部へ。2010年より同大学院獣医学研究院教授。文部科学省学術調査員、内閣府食品安全委員会専門調査委員、厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員、環境省中央環境審議会専門委員を歴任。また日本学術会議会員。日本トキシコロジー学会奨励賞、日本農学進歩賞、文部科学大臣表彰・若手科学者賞、ソロプチスト日本財団女性研究者賞、日本環境化学会学術賞などを受賞。専門は、環境化学物質の毒性学的影響に関して、人や実験動物、野生動物を対象に研究。特に、*in vivo*, *in vitro*, *in silico*からの解析を行い、国内だけでなくアフリカなど海外フィールドにおいて、国際協働のサーベイランスも行っている。

伊丹 健一郎 (名古屋大学 トランスフォーメティブ生命分子研究所 拠点長 教授)



【専門分野】合成化学、分子ナノカーボン科学、触媒科学、生物活性分子

京都大学にて博士号取得後、2005年名古屋大学物質科学国際研究センターを経て、2008年より同大学大学院理学研究科・教授。また、2012年から名古屋大学トランスフォーメティブ生命分子研究所拠点長、2019年から台湾中央研究院・研究フェロー（現職）を兼任。The Netherlands Scholar Award for Supramolecular Chemistry、中日文化賞、永瀬賞、アメリカ化学会賞Arthur C. Cope Scholar Award、Mukaiyama Award、王立化学会フェロー、ドイツノベーション賞、クラリベイト・アナリティクス高被引用研究者賞など多数受賞。世界で初めて「カーボンナノベルト」の合成に成功し、次世代材料として期待されるナノカーボン材料の産業化に向け大きな成果を出し、また「分子ナノカーボン科学」とい新しい研究領域の発展に向け尽力している。

創発POの略歴等(3)

井村 順一（東京工業大学・工学院・教授（副学長））



【専門分野】制御工学

京都大学にて博士号（工学）取得後、広島大学工学部、東京工業大学情報理工学研究科を経て、2004年同大学情報理工学研究科教授、2016年同大学工学院教授を務め、2018年より副学長（教育運営担当）を兼任。計測自動制御学会、IEEE Control System Society理事、IFAC（国際自動制御連合）政策委員、4つの国際誌のAssociate Editor、国際会議IFAC World Congressの2023年横浜開催の実行委員長などを歴任。

専門は制御工学で、システム制御理論を軸に次世代の電力システムや交通システム、バイオシステム等への応用に関する研究を推進。

川村 光（豊田理化学研究所・フェロー）



【専門分野】物性科学

東京大学にて博士号（理学）取得後、大阪大学教養部、京都工芸繊維大学工芸学部を経て、1999年より大阪大学理学研究科教授を務める。2020年4月より、公益財団法人豊田理化学研究所フェロー。その間、日本学術振興会・学術システム研究センター主任研究員（数物系）や日本物理学会の理事、副会長、会長を歴任。2017年より日本学術会議会員。

専門は、理論物性物理学、統計物理学で、特に、様々な相を含む磁性体の相転移・臨界現象について、競合（フラストレーション）や乱れ（ランダムネス）について世界的にも先駆的な理論を導出した。また、統計物理モデルを、地震現象なども含む協力現象に展開するなど、幅広い分野に亘る研究を推進。

創発POの略歴等(4)

北川 宏 (京都大学・大学院理学研究科・教授)



【専門分野】固体物性化学、低次元電子系物性、錯体化学、ナノ物質科学

分子科学研究所、英国王立研究所、北陸先端科技大学、筑波大学を経て、2003年九州大学教授、2009年より京都大学教授を務め、2014年より理事補・副プロボストを兼任。その間、文科省科学研究費審査部会専門委員、文科省研究振興局科学官、JST「革新的触媒」研究総括、JSPS学術システム研究センター主任研究員、錯体化学会・会長などを歴任。井上學術賞、マルコ・ポーロイタリア科学賞、日本化学会学術賞、文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）、英国王立化学会フェロー、ドイツ研究振興協会メルカトル・フェローなどを受賞。博士（理学）。レアメタル「パラジウム」や「ロジウム」を人工的に作り出す「元素間融合」を実現。このメカニズムを解明し、狙い通りの物質を合成するための機能設計や予測原理の確立を目指した研究を推進。

合田 裕紀子 (理化学研究所 脳神経科学研究センター・副センター長)

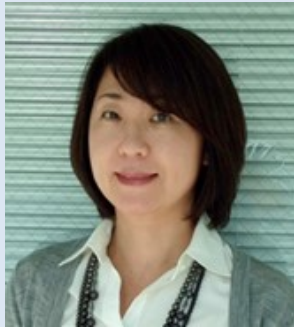


【専門分野】神経科学、脳神経科学

スタンフォード大学にて博士号（理学）取得後、ソーク研究所、カリフォルニア大学サンディエゴ校、2002年に英国MRC細胞生物学ユニット(ロンドン大学) シニアグループリーダー、2011年理化学研究所脳科学総合研究センターシニアチームリーダー、2015年副センター長、2018年より脳神経科学研究センター副センター長を務める。その間、日本学術会議連携会員、英国MRC非臨床教育研修パネル委員、Eppendorf and Science Prize for Neurobiology Panel、マックスプランク実験医学科学諮問委員などを歴任。Sloan Research Fellow、Damon Runyon Scholar Award、NARSAD Distinguished Investigator Award、塚原仲晃記念賞などを受賞。専門は、神経科学。脳機能のメカニズムに新たな洞察を生み、シナプスの研究において世界をリード。とくに的確な行動や計算に不可欠な脳の情報処理を担うシナプス回路の稼働原理やこのシナプス機構の不具合が導く精神疾患発症メカニズムの解明を目指す。

創発POの略歴等(5)

塩見 美喜子 (東京大学・大学院理学系研究科・教授)



【専門分野】RNA生物学

京都大学にて博士号取得後、ペンシルバニア大学ハワードヒューズ医学研究所、徳島大学ゲノム機能研究センター、慶應義塾大学医学部を経て、2012年 東京大学大学院理学系研究科教授。博士（農学・医学）。日本RNA学会会長、The RNA Society Director、日本分子生物学会副理事長などを歴任。2009年、猿橋賞を受賞。2018年、我が国の女性生命科学研究者初のEMBO Associate Memberに就任。精神遅滞を伴う遺伝性疾患の原因遺伝子 *fmr1* の機能解明や microRNA など小分子RNA による遺伝子発現制御機構「RNAサイレンシング」の分子機序解明などを通して我が国のRNA生物学研究を牽引。トランスポゾンによるDNA損傷から生殖ゲノムを守る piRNA 機構の研究が高く評価される。piRNA 機構の全容解明、生殖関連疾患の治療や診断への応用を目指す。

田中 純子 (広島大学 理事・副学長 大学院医系科学研究科疫学・疾病制御学 教授)



【専門分野】公衆衛生学、社会科学

お茶の水女子大学を卒業後、米国ミネソタ大学を経て、広島大学医学部へ。2009年同大学教授。2012年肝炎・肝癌対策プロジェクト研究センター、2019年疫学&データ解析新領域プロジェクト研究センターを立ち上げ、2020年より広島大学理事・副学長を務める。その間、JSPS学術システム研究センター専門研究員、日本学術会議連携会員、厚生労働省 肝炎対策推進協議会委員、同薬事・食品衛生審議会専門委員、日本赤十字社 需給予測委員会委員などを歴任。広島大学教育賞、同学長賞などを受賞。博士（医学）。専門は、ウイルス肝炎（HCV, HBV）の疫学を中心に、免疫血清学的研究。医療、保健、福祉、医療行政の現場で「科学的根拠に基づく医療」が求められる中、持続感染者の推定により具体的な肝炎対策に大きく貢献。ウイルス肝炎だけでなく他の疾病も視野に、制御をめざした *in silico*, *in vitro* の疫学研究も推進。また、公衆衛生学の人的育成にも尽力。

創発POの略歴等(6)

堀 宗朗 (海洋研究開発機構 付加価値情報創生部門 部門長)



【専門分野】計算地震工学、応用力学

カリフォルニア大学サンディエゴ校でPh.D.取得後、2001年東京大学地震研究所教授（～2018年）、2012年同巨大地震津波災害予測研究センター長、2012年理化学研究所計算科学研究機構ユニットリーダー、2018年海洋研究開発機構理事補佐を経て、2019年同部門長。内閣府SIPプログラムディレクタ（第1期・第2期防災分野）などを歴任。2020年文部科学省科学技術賞などを受賞。国際誌の主編集者等を歴任。専門は計算地震工学と応用力学。地震動・地震応答解析の理論と手法の開発、スパコンを使う都市全体の地震・津波の被害予測シミュレーションの開発、i-Constructionでのインフラデータの高度利用システムの開発等に関わる研究を行っている。

水島 昇 (東京大学 大学院医学系研究科 教授)



【専門分野】医化学、細胞生物学

東京医科歯科大学にて博士号（医学）取得後、基礎生物学研究所を経て、2004年東京都臨床医学総合研究所室長、2006年東京医科歯科大学医学部教授、2012年10月より東京大学医学部教授を務める。その間、日本生化学会会長・理事、日本分子生物学会理事、日本細胞生物学会理事などを歴任。日本学術振興会賞、井上學術賞、武田医学賞、トムソン・ロイター引用栄誉賞、上原賞、持田記念学術賞、藤原賞など多数受賞。American Society for Clinical Investigation、EMBOメンバーシップ。哺乳類を中心とし、オートファジーなどの細胞内分解の分子機構と生理的意義について、細胞生物学、生化学、遺伝学、生理学、生物物理学的研究を行っている。

創発POの略歴等(7)

八木 康史 (大阪大学 産業科学研究所 教授)



【専門分野】知覚情報処理、知能ロボティクス

大阪大学大学院基礎工学研究科修士課程了後、三菱電機株式会社応用機器研究所／産業システム研究所、大阪大学を経て、2003年大阪大学産業科学研究所教授、2012年年同研究所長、2015年8月から大阪大学理事・副学長を務め、現在、産業科学研究所教授。Asian Federation of Computer Vision Societies (Vice President)、情報処理学会フェロー、文部科学大臣表彰（研究分野）などを受賞。工学博士。専門は、コンピュータビジョン、パターン認識、ロボットビジョンの研究等。世界に先駆け全方位カメラ（周囲360度を一度に撮影）を考案したり、裁判の証拠として利用されている世界初の歩容鑑定システムをリリースするなど数々の先端技術を開発している。

吉田 尚弘 (東京工業大学 地球生命研究所 特任教授)



【専門分野】環境動態解析、地球化学

三菱化成生命科学研究所、富山大学理学部、名古屋大学大気水圏研究所を経て、1998年より、東京工業大学大学院教授を務める。2012年からWPI地球生命研究所の主任研究者を兼務し、現在、専任。その間、国連環境計画（UNEP）の基幹出版GEO-6のサイエンスアドバイザー、日本学術振興会・国際事業委員会委員、国際アイソトポマー会議代表、日本地球化学会会長、日本地球惑星科学連合理事などを歴任。日経地球環境技術賞、日産科学賞、紫綬褒章、米国地球物理学連合フェロー、米国・欧州地球化学会フェロー、C.C. Patterson Award、三宅賞など多数受賞。博士（理学）。同位体分子の自然存在度計測法を多岐にわたって開発し、地球温暖化やオゾン層破壊の研究、地球と生命の起源と進化に関する研究など、多様な研究分野の発展に大きく貢献している。

第45回井上春成賞 贈呈式・受賞講演



科学技術振興機構

いのうえはるしげしょう
井上春成賞

「井上春成賞」は、科学技術振興機構の前身の一つである新技術開発事業団の初代理事長で、工業技術庁初代長官 井上春成氏がわが国科学技術の発展に貢献された業績に鑑み、同団創立15周年を記念して昭和51年(1976年)に創設された賞です。

大学、研究機関等の独創的な研究成果をもとにして企業が開発、企業化した技術であって、わが国科学技術の進展に寄与し、経済の発展、福祉の向上に貢献したもののなかから特に優れたものについて研究者および企業を表彰いたします。

井上春成賞 概要

1. 設立 : 1976年第1回開催 (2020年:第45回)
2. 募集期間 : 例年12月下旬～翌年2月末
3. 表彰件数 : 原則として2件 (これまでこのべ98件196名) (2020年9月16日現在)
4. 受賞者 : 原則として、表彰対象技術毎の研究者1名、および企業1社
5. 表彰式 : 例年7月中旬 於 日本工業倶楽部会館(予定)
6. 賞の内容 : 表彰状・賞牌 研究者に研究奨励金 100万円



第44回井上春成賞贈呈式【令和元年7月18日(木)】

本日の登壇者



糸崎 秀夫

●糸崎 秀夫（大阪大学 名誉教授）

「近赤外光スペクトルを用いた液体爆発物検査装置の開発」研究者
1974年大阪大学工学部精密工学科卒業。1976年同大学大学院工学研究科精密工学専攻博士前期課程修了、住友電気工業（株）入社。1979～1981年ノースウェスタン大学材料科学博士課程留学。1982年同大学PhD取得。1992年（独）超伝導センサ研究所高温遮蔽研究部長。1998年住友電気工業（株）伊丹研究所電子材料研究部長。2001年日本ITF（株）理事。2001年（独）物質・材料研究機構超伝導材料研究センター主幹研究員。2004年大阪大学大学院基礎工学研究科教授。2016年より大阪大学名誉教授。2019年より同大学共創機構特任教授。



福岡 淳

●福岡 淳（北海道大学 触媒科学研究所 教授）

「青果物鮮度保持用プラチナ触媒の開発」研究者
1982年東京大学工学部合成化学科卒業。1984年同大学院工学系研究科工業化学専攻修士課程修了。1986年北海道大学触媒研究所・触媒化学研究センター助手。1989年工学博士（東京大学）。1991年東京農工大学工学部講師。1995年同学部助教授。1997年北海道大学触媒化学研究センター助教授。2007年同センター教授。2010年同センターセンター長。2014年北海道大学総長補佐（現職）。2015年北海道大学触媒科学研究所教授（現職）。2016年より国際触媒学会オフィサー。2018年一般社団法人触媒学会会長。